

第1章

はじめに考えよう

1. アトピー性皮膚炎のあるところと、ないところ

私は10年程前にモンゴルのウランバートルにある国立医科大学皮膚科客員教授として皮膚科医の卒後教育を行っていました。約40名の皮膚科専門医（90%が女医）は2日間の講義で2年間通用の修了証書を授与されます。つまり、2年毎に勉強するのです。成田から5時間、ゴビ砂漠を越えると眼下にウランバートルが現れます。日本の4倍の土地に、国民は当時人口270万人、その大半が集中している都会です（図1、2）。飲用には不適ですが水道もあり、電気などインフラは整備されて入浴もできます。古いマンションが沢山立ち並んでいます。車と携帯社会が押し寄せて、酸素が少ない高原の盆地を整備不良の日本の中古車が排気ガスと埃をまき散らし、公害で窓も開けられません。子ども達を診察すると、乾燥肌やアトピー性皮膚炎がたくさん見られますし、母親のステロイド嫌いも日本と同じです。

ところが、そこから四輪駆動車で大草原に一步出ると様相がまったく変わります。草原は一見平坦ですが、凹凸で、たまに降る雨が流れた深い溝があちこちにあり、硬い20～30cmの草が一面に生えた中に拳大の石ころが無数に転がっています。身体がバウンドする道なき道を1時間ほど走ると遊牧民のゲル（中国語パオ）が現れます。隣のゲルはまったく見えません。車でも1時間かかるほどお互いが孤立です。電気は自家発電、ガス、水道などはありません。高冷地なので、夏季でも乾燥させた動物の糞のストーブを使い、空気は乾燥、入浴せず、洗濯もままならない衣服、室内はじゅうたんに囲まれた暮らしです。子ども達には、さぞや乾燥肌やアトピーが多いであろうと診察すると、なんと全員スベスベの健康な肌なのです（図3、4）。蒸し焼きの骨付き羊肉をナイフで切り取りご馳走になると両手は



第2章

まず正しい診断から 治療対策を立てよう

○わかりやすいアトピー性皮膚炎の診かた



I. アトピー性皮膚炎とは

病気には沢山の種類があります。しかしその中で、世の中に知れ渡っている病名があります。しかも専門医が使う病名がそのまま使われているのです。ガン、喘息、花粉症、インフルエンザなどです。中でもお母さん方が気にしているのが「アトピー性皮膚炎」という病名ではないでしょうか。初診の時に「アトピーでしょうか」と病名で質問されます

し、おそらく母親達の会話にも、この病名が飛び交っていると思います。なぜそのように気にするのか不思議なくらいですが、では、この病気を現在の皮膚科学では、どのように考えて診断、治療するのかを、とにかく一度ご覧ください（表1：表紙裏）。専門医以外には分かりにくいと思います。



II. ではどんな病気なのか

1. アトピー性皮膚炎は新しい病気ではない

アトピー性皮膚炎というと、現代社会に突如として現れた、モンスターのような病気と思えるかもしれ

ません。たしかにアトピー性皮膚炎という病名が生まれたのは、1930年代と比較的最近のことですが、アトピー性皮膚炎そのものは昔からある病気です。古代ローマの皇帝アウグ



第3章

治療のカギは 塗り薬の上手な使い方



1. 塗り薬をうまく使うのが治療の早道

1. 子どもには薬を塗れない環境がある

アトピー性皮膚炎は皮膚に現れた変化なので、皮膚に直接働きかける外用薬、つまり塗り薬を使うことが、もっとも手っ取り早い方法であることは、自明の理だと思います。

ところが多くの方は、塗り薬よりも飲み薬のほうが、抵抗が少ないように見受けられます。アトピー性皮膚炎は、胃がかゆいわけでも、肝臓がかゆいわけでもないのに、皮膚に届く前に内臓を回っていく内服薬に期待したがるのはどうしてなのでしょう。

内服薬のほうに魅力を感じるのは、飲み薬なら子どもの口を無理やりにも開けて、飲ませてしまえばすむからかもしれません。

子どもには、塗り薬をなかなか塗

れない環境があります。赤ちゃんは自分で塗れない、幼児はお母さんのまねをして塗るけれども、全部をカバーはできない、学童になれば学校での協力が必要、思春期になると、自分で自覚しないかぎりはお親にも肌を見せない触らせない、しかも生活が忙しくて薬を塗る時間もない……というわけで、お医者さんが出した薬は十分に塗られないままになりがちです。

2. “塗らない塗り薬は効かない”

自分のお化粧を先にして、さあ子どもに薬をとっていたら、すでに子どもは家を飛びだしていた。こんな状況では、病気はなかなかよくなりません。“塗らない塗り薬は効かない”に決まっているのですから。

では、どうして薬を塗らなくては